

西洋の庭園の思想的背景

シンメトリーからイレギュラーへ

黒木朋興*

Irregular gardens and symmetry gardens in the western culture

KUROKI Tomooki*

キーワード：庭園，シンメトリー／対称性，数比，崇高

1. はじめに

美しい庭、と言えどこを思い浮かべるだろうか？ 東京だったら清澄庭園や六義園などが挙げられることも多いかもしれない。どこにせよ、日本庭園と言え、木々や池の自然な曲線の美しさに特徴があることは言うまでもない。自然といっても、原生林の荒々しい美しさではなく、盆栽のようにあくまでも人間の手によって調整された美しさである。そこには、非対称＝アシンメトリーな造形が見出される。

対して、ヴェルサイユ宮殿に代表される西洋庭園の<美>とは、対称性＝シンメトリーにこそ重きが置かれる。地図でヴェルサイユ宮殿を確認してみよう。幾何学的な文様が施された庭園が確認出来るだろう。また、その庭にある刈り込まれた木を日本庭園の木と比べてみよう。どちらも枝葉が刈り込まれている点において、人工的な造型であることが分かる。しかし、日本の非対称性に対して、フランスの対称性＝シンメトリーへの嗜好がよく分かるだろう。

重要なのは、「美」といったものの定義が日本とは違うということだ。「花鳥風月」に象徴される規

則性のない形に美を感じる日本の芸術とは異なる価値観によってフランスの美が規定されているのである。



ヴェルサイユ宮の植木



ホテルニューオータニ日本庭園の植木

*理工学部情報システムデザイン学系非常勤講師 Part-time Lecturer, Division of Information System Design, School of Science and Engineering

2. ルネサンス期の建築論

この西洋の美の価値観はどこに由来するのだろうか？と言えば、ルネサンス期の建築論ということになるだろう。この時代、基本文献として典拠とされたのは古代ギリシアのウィトルウィウスが記したとされる『建築論』であった。古代ギリシアと言っても、この理論家に関しては不確かなところが多く、その実像は伝説のヴェールの中にあると言っても過言ではない。つまり、ここで問題となるのはウィトルウィウス自身の思想というよりは、ルネサンス期の学人たちに受容された古代ギリシア思想だと言って良い。この書物に関する議論の中からシンメトリー＝対称的な構築物に美を見出す思想が生じたのである。ここでウィトルウィウスは、シュムメトリアという用語を使っており、この言葉こそがまさにシンメトリー（対称性）の語源となっている。

シュムメトリアとは、幾何学の理論に基づいて組み立てられる関係のことと言える。幾何学に基づく関係とは、全体と部分のバランスが比例関係によって決められた構築物のことである。そもそも古代から中世に至るまで西洋では、宇宙は比例関係によって成り立っていると考えられてきた。比例に基づく構造の探求とは世界の成り立ちを探る学問であったのである。

3. 比例と宇宙

比例関係の研究というと、音楽もそれをテーマとする重要な科目の一つであったことをここで指摘しておきたい。音階は $N/N+1$ という数字を使って作られるのである。例えば、 $1/2$ はオクターブ、 $2/3$ は5度（ドとソの音程）、 $3/4$ は4度（ドとファの音程）、 $4/5$ は長3度（ドとミの音程）、 $5/6$ は短3度（ドとミ♭の音程）というような比例関係に基づいて音階を作る。

音楽が数比によって成り立っているのであれば、音楽は宇宙の成り立ちと深い関係がある学問ということになる。例えば、惑星の軌道が円ではなく楕円であることを発見したドイツの天文学者ヨハネス・ケプラー（1571-1630）は、惑星が楕円軌道上

を太陽に近いところでは速く、遠いところでは遅く移動していることに注目し、その速度の比からなる音階によって惑星は宇宙空間で音楽を奏でていると考えていたことを指摘しておく。

このように世界が数比関係によって構築されているという考えを基に宇宙の成り立ちの神秘を探ろうという姿勢は、やはり古代ギリシアの哲学者ピュタゴラス以来の伝統であると言って良い。ピュタゴラスと言えば現在では、音楽理論や数学の公式で名を知られているが、その実像はやはり伝説のヴェールに包まれており、音楽を使った儀式を重んじる教団の教祖的な人物であったと言われている。

4. 数比と神秘主義

このように世界を数比関係で解釈しようという姿勢は科学的と捉えられるかも知れない。確かに比を示すラテン語は「ratio」であり、これは現在の「reason=理性」の語源である以上、世界を理性でもって解しようという姿勢は科学的以外の何物でもないように見える。ただし、ピュタゴラス以降のこのような姿勢は、紛れもなく神秘主義思想であることを指摘しておきたい。

神秘主義思想とは、神の秘密を探るための思想である。我々人間や他の生物が住んでいる現世と神の世界をつなぐ思想であり、神がこの世界を創造したとされるキリスト教においては、神がどのような技を使って宇宙を構築したのか、という秘密を探る思想だとも言える。そしてこの世が数比関係によって創られているのだとすれば、神が描いた数字からなる設計図を探る営みが数比研究、つまり「ratio」を扱う学問ということになる。まさに数学も音楽も、神の秘密を探る神秘思想の一部であったというわけだ。

このような神秘思想は、プラトンを中心とする古代ギリシアの哲学研究に関心が高まったルネサンス期において一気に社会に広まっていく。この時代に、数比関係に基づき全体と部分がバランスよく整えられた幾何学的な建築や庭園が美しいと見なされていたわけだ。対称性＝シンメトリーを重んじる幾何学的な形象と言えば、まさにヴェルサイユ宮殿とその庭園が挙げられるだろう。現代の私たちから

すれば、自然科学の合理的精神がそこに働いていると考えるかも知れない。確かに、ルネサンス期以降の幾何学的な形象においては、「ratio」が重んじられ、この「ratio」が「理性=reason」の語源である以上、現在の自然科学の合理的精神に繋がる要素があることは否定できない。しかし、「ratio」が神秘思想の核となっていることも事実なのだ。そもそもキリスト教はロゴス=言葉=理性を重んじる宗教であることを思い出しておきたい。ヴェルサイユに代表される理路整然とした幾何学的な形象は、理性に基づき世界を創造した神の神秘に辿り着こうという姿勢の現れなのである。つまり、ヴェルサイユのシンメトリー=対称的な構築物や庭園は、神秘性の対極にあるわけではなく、まさにルネサンス期以降のキリスト教神秘主義思想の表出の場であるということだ。

5. 一点透視法と幾何学

このルネサンス期に『建築論』を書いた最重要人物の一人にレオン・バティスタ・アルベルティ(1404-1472)がいる。アルベルティは、ウィトルーウィウスと違ってシュムメトリアの語は使ってはいない。にもかかわらず、すべての構成要素がバランス良く配置されていることを美の定義として挙げる以上、彼がシンメトリー=対称的な形象に美を見出しているのは明らかだろう。

このアルベルティは、一点透視法を絵画の世界に導入したことで知られている。一点透視法とは、消失点を設けることによって平面=二次元の画面を立体的=三次元に見せる遠近法の技術である。この一点透視法を用いた初期の傑作としてレオナルド・ダ・ヴィンチの『最後の晚餐』(1495・1498)が挙げられる。

さて、この消失点の導入は座標軸上の原点=Oの発明と関係があるのではないか、という指摘があることを言っておきたい。座標軸の発明に関しては、17世紀フランスの哲学者デカルトの業績に帰せられることが多い。しかし、実のところ、彼の著作の中に原点=Oへの言及はない。ただ、デカルト自身が座標軸を発案したのではないにせよ、彼と彼周辺の哲学が、座標軸を導入し飛躍的に発展した当時

の幾何学の流れと大いに関連しているのは事実なのだ。となれば、アルベルティによって構図の中心に消失点を設定し絵画を描く技術が確立されたことと、座標軸の中心として原点=Oが設定されたことは、深く関係していることは明らかだろう。

6. 建築と庭園

アルベルティにとって庭園造形も建築の一部であった。よって、シンメトリー=対称的で幾何学的な庭が数多く作られることとなる。ヴェルサイユ宮の庭園はその代表例である。何より、このような整然とした形象が美しいと見なされていたのである。と同時に、この美は、キリスト教の伝統では善や真につながっていることを確認しておきたい。つまり、美しいということは善いことであり、善いことは真理に通じているという真・善・美の思想である。もちろんこのような美の探求が、神の創造の神秘を探るためのものであったことはすでに指摘した通りである。

建物の場合、シンメトリー=対称的な構造にするのには実用的な意味がある。イレギュラーな形にした場合、建築物を支える柱や壁などにかかる力のバランスが崩れることになり耐久性が弱くなってしまふ。例えば、一本の柱の両側にかかる力が5対5であれば左右のバランスが取れることになるが、6対4など非対称であればどちらか一方に過重に負担がかかることになり傾きが生じやすくなるのは自明だろう。

対して、庭の場合、このような問題は起こり得ない。庭の構成は重力に左右されないからである。というわけで、18世紀にかけてイレギュラーな庭園を指向する流れが生じるのも不思議な話ではない。やがて、このような建築と庭園の違いに関しては、ジャン=マリ・モレル(1728-1810)の庭園論においてまとめられることになる。

7. 異国趣味と<崇高>

このようなイレギュラー庭園の流れに関して、フランスでは英国式庭園とか中国式庭園と呼ばれていたことを指摘しておきたい。ところが、実のこ

る、イギリスや中国にいわゆる「イレギュラー庭園」があったわけではない。つまり、フランス人が実際の庭園技術に基づいて議論をしていたわけではなく、フランスにおける異国趣味がイレギュラー庭園とイギリスや中国という国名を結びつけていたというのが本当のところだろう。

ただし、イレギュラー庭園に関する議論が18世紀フランスにおいて盛んになったのは事実である。この種の文章は多数残っているが、有名なものとしてジャン＝ジャック・ルソーの『新エロイズ』(1756-1758)の中の描写が挙げられるだろう。自然の背後にある幾何学的な理路整然とした世界ではなく、目の前のイレギュラーな自然の事物に重きをおく議論である。

このような新しい流れには<崇高>の発見が大きく作用していると言えるだろう。アルプスの山々の壮大な風景を目にした時、ヨーロッパの人々はそれまでの<美>の定義では説明のできないえも言われぬ感動を<崇高>という言葉で表したのである。前述のように<美>とは幾何学的で理路整然とした形象に与えられる形容である。対して、自然の風物が醸し出すイレギュラーな形象はこの<美>の定義には当てはまらなかったのだ。となれば、こ

の<崇高>の発見と新たな庭園造形に関係のあることが推測される。

8. まとめ

日本人は自然が織りなすイレギュラーな線描によってなされる風景を美しいと感じる文化に生きている。この美的感覚は「花鳥風月」という言葉に象徴されていると言って良いだろう。対して、西洋ではヴェルサイユ宮に代表される対称的＝シンメトリーで幾何学的な形象を美のモデルとして扱う文化がある。しかしそれは多くの日本人が考えるように、単なる理性主義の発露というわけではなく、キリスト教思想をベースにプラトンを中心とした古代ギリシア思想を解釈する中で醸成された神秘主義思想の反映でもあったことが確認できたように思う。

参考文献

- 白須 貴志、『フランス18世紀散文詩の言説生成 オプトポエジー試論』、風間書房、2004.
- M. ウェーバー、安藤英治・池宮英才・角倉一郎訳、『音楽社会学』、創文社、1967.